

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第二十九回）

とよくに きく

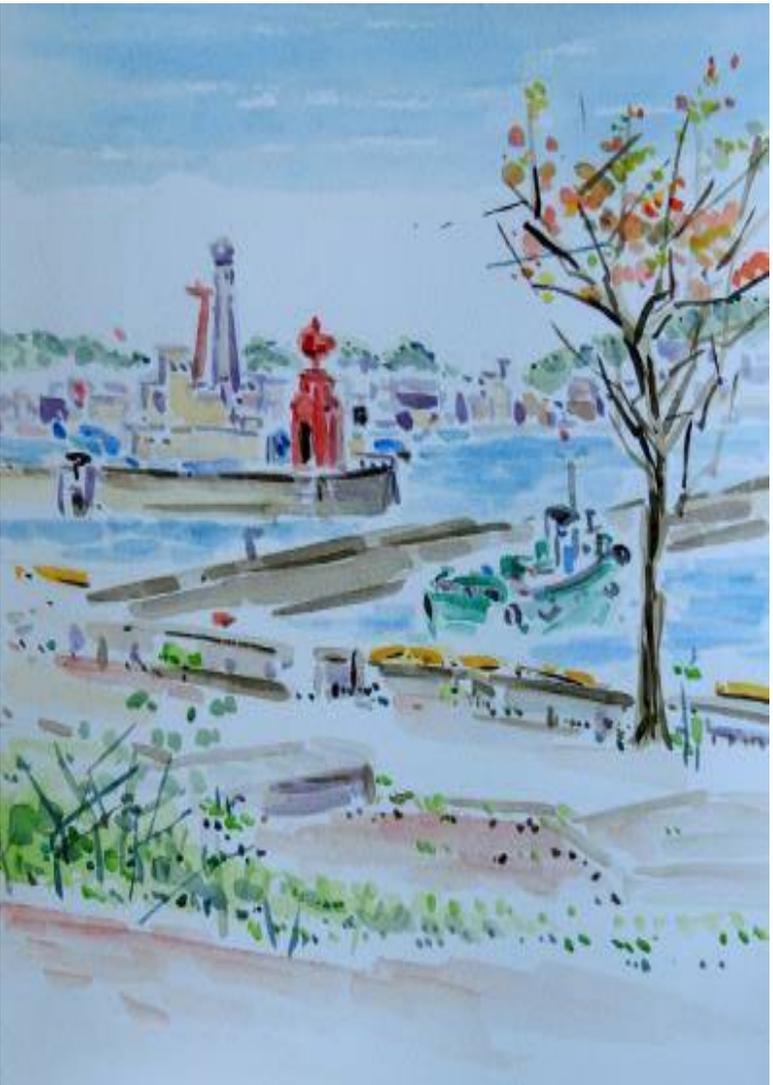
## 「豊国の企救の浜」

ひびきなだ

・「豊国の企救」は九州の最北端に位置する福岡県北九州市の響灘、ひびきなだ 関門海峡に面し福岡県北部にあった旧郡名であり、「企救の浜」の位置については、いくつかの説があるが【古代地名大辞典・本編】によると「現在の北九州市門司区から戸畑区までの長い海岸線で古昔は白砂青松が続く景勝地であったとあり、また、この海岸は企救の長浜・高浜と呼ばれていた。」とあるが、今は埋立により企救の浜は工業地帯、都市化等により昔の面影はない。

（写生地） いにしえに企救の浜が近くに続いていただろうと思われる門司港

沿岸から関門海峡と対岸の山口県下関風景を描く。 （杏花）



・万葉の時代には九州を統合する政治機関であった大宰府と大和にある都とをつなぐ交通路は急速に整備され、現在の北九州の門司、小倉、若松を経て大宰府に向かう多くの公用人や所用のある私人たちが通行したと見られる。長い旅路を経て九州に入ると、海岸線に沿って白松青松の道路が続いている。旅人たちはこの美しい景色に、しばし旅の疲れを忘れただろうと思われる。万葉集にはこの辺りを詠んだ歌が収められている。

## 「問答の歌」

とよくに きく ながはま く  
1) 豊国の 企救の長浜 行き暮らし 日の

く おも  
暮れぬれば 妹をしそ思ふ

卷十二―3219 作者 未詳

(解説) 豊国の企救の長浜を一日中歩き続け、日が暮れてゆくと、そぞろに  
としい妻のことを思います。

とよくに きく たかはま たかたか  
2) 豊国の 企救の高浜 高々に

よ  
君待つ夜らは さ夜ふけにけり

卷十二―3220 作者 未詳

(解説) 豊国の企救の高浜の高の名のように、高々に爪先き立つ思いで、今か

今かと君を待つ夜は、もう更けてしまった。

・この問答歌は長い旅を続け家で待つ、いとしい妻を想う夫の歌と夫の帰りを今か今かと家で待ち続ける妻の歌であろうか。

(写生地)

JR小倉駅(新幹線口・北側)前から門司に向かう国道199号線を東へ約500mのところを流れる小倉港に注ぐ砂津川に架かる砂津大橋を渡り川沿いを50m程上流にいくと江戸時代の小倉城郭の門の一つ門司口門跡がある。この前の道が門司方面に向かう九州諸大名の参勤交代の道であった。

・この道の両側が小倉北区長浜町になるが、さらに、此の道を約50m東へ行くと北側に大木に囲まれ、歴史を感じる古社「貴布禰神社」きふねがある。この神社の前を通り東へ向かう道が古くからの海岸線であったと見られている。

・今、貴布禰神社からは海岸部までは北へ約500m離れているが、神社東側横の道路には海側に向かって低くなる段差があり、この段差地が今は埋め立てられたが古くからの海岸線であったことが推定され、この歌で詠われている「企救の長浜、高浜」の一部であったらう思われる。

・今の海岸部の近くに日本の近代産業発展の礎いしずえとなってきた鉄鋼会社の煙突が林立している。

(写生地)

この万葉集に詠われている古代の「企救の浜」海岸線沿いに建てられたと推定される「貴布禰神社境内」を描く。前の道は江戸時代の参勤交代が通った道。

(杏花)



(所在地) 北九州市小倉北区長浜町2番 「貴布禰神社境内」

(参考文献) 古代地名大辞典、米津三郎著「小倉藩史余滴―『万葉集と北九州』」など